

HOKKAIDO TAKARA WEB

小野哲也

さん

ポー川史跡自然公園学芸員



標津遺跡群を

世界遺産に。

18

―いつ頃から標津に？そのきっかけは？

平成21年の4月から役場の嘱託職員で入りました。前任の方が定年まで2年という話で、後任に誰か適した人材はいないかということで、内容が多岐に渡る遺跡があって、アイヌ文化に関するものもあって、自分がアイヌ文化に興味を持って北海道に来て、考古学を専攻しているということで声がかかったんです。色々検討し、行ってみようかということで来ました。

―他の地域との明らかな違いは？

標津では少なくとも7000年前からはサケに比重をおいた暮らしがあった。アイヌ文化でサケを利用するってよく言うんですけど、全道的に見るとサケを重視した暮らしというのは鎌倉時代くらいから。サケ自体も、この辺のサケは少なくとも江戸時代頃には、質の高いサケが上がっていた記録があるので、やっぱりなんか違うんでしょね、質・量的に。品質の高いサケが育っていく、そのベースとなるジオ的な部分でのキャバが違うんでしょうね。

―標津町の魅力を伝えていくのに必要なことは？

歴史っていうのは生きていくには全然必要のない領域なので、別に見向きされなくても構わないのかもしれない。でも地域づくりとかを考えていった時に、なぜここに人が集まっているのかっていうのは一過性のもではなくて意味があると思うので、その積み重ねが歴史であって、そのルーツをたどっていけばきっとこの遺跡までたどり着くんだろうなと。最初は遺跡だけの魅力を色々発信しようとしていたんだけど、それじゃあこの価値は伝わらないだろうと思って、歴史そのものだけではなくて、今こう地域があって、背景にはちゃんと地域の歴史的背景があるんだよと知ってもらう仕掛けを作っていきたい。

―現在力を入れている活動、目標は？

自分の中の最終目標は標津遺跡群を世界遺産にすることなんですよ。それにはここを支えてくれる地域の方の存在も必要だし、この価値を世界に発信していく上でのわかりやすいストーリーが必要で、それが今回標津遺跡群を含む根室地域を代表する31の文化財を根拠にまとめた日本遺産のストーリーになる。そういったものをきちんと地域に落とし込んでいった先に標津遺跡群が世界遺産登録になっていくんだなと思っています。人口減少時代になり、長期的に見ると維持管理できる人がいなくなることで文化財が失われる危険があって、ストーリーが嘘と言われる可能性がある。そうならないためにもその証拠である文化財を持続可能なものにしていく仕組みを作っていくのが最初の目標です。



インタビューの様子

―標津に対して魅力を感じている部分は？

学芸員としては、やはりこの地域の歴史・文化っていうところがすごい面白い。自分の中ではそれが魅力で来たのでそこが1番だと思います。北海道って自然とか食とかでももちろん魅力なんですけど、歴史・文化はこの地域がとびぬけて豊富だと思っていて。それって目に見えるものではないので、なかなか理解してもらえないことが多いんですけど、そこを何とか伝えていきたいですね。

―ここは道内でも歴史的な遺産が多い方？

根室海峡沿岸のエリアって千島列島と連なる地理的な環境もあって、人が集まりやすかった場所だと思うんですよね。だからこそ歴史的なイベントが起きて、文化が培われてくるっていう流れだった。ここは深い自然のすぐ近くに人が暮らせる場所があり、さらに多方面から人が集まってきて歴史が積み重ねられてきたっていう場所。しかもその歴史っていうのが、ローカルの歴史ではなくて、日本列島全体に影響を与えるような結構重要なイベントが起きるのでそこが面白いところですよ。

齋藤智美

さん

移住者



標津町の魅力は

人々の暮らしの営み。

19

―標津に越してきたきっかけと最初の印象は？

結婚して埼玉県坂戸市から引っ越して来ました。平成30年から定住しました。最初の印象は、人がいない！（笑）でも一番感動したのは海です。やっぱり自然は本当に圧倒されました。あと産業も。漁師さんの船がいっぱいあったりとか、あと酪農家さんも。

―現在の活動を教えてください

標津町地域協議会の研修生を2018年の2月から今年の3月までやらせて頂きました。最初は地域のことを勉強するって感じでガイド協会さんにくっついて修学旅行生の受け入れとかで勉強させてもらって、だんだんインバウンドの担当をさせてもらってから地元のガイドさんと旅行者さんをつなぐ役割をしたりとか。通訳を含めて。あと自分がそのままガイドになったりツアーコーディネーターをさせてもらったりしました。ガイドは、漁業を紹介させていただく産業ガイドです。そのあとはお茶漬けプログラム開発がメインになりましたね。

―お茶漬けプログラムについて教えてください

去年の夏ぐらにお客さん受け入れで、ポー川の番屋でお茶漬けと一緒に作ってみたのが最初です。お茶漬けプログラムの後ろ側には色んなものが隠されていて、根室海峡の、この地域の歴史・文化・自然だったりとか産業を、お茶漬けを通して見せたっていうのが一番の目的です。お茶漬けを食べる前に地域の文化を紹介をする場面があるんですけど、たとえばそのあと鮭節工場に行ってみようとか、あとは荷揚げ見学で「あ！さっき見たサケだ。こうやって獲れて私たちのものに届いてるんだ。大事に食べなきゃ」みたいなのを伝えたい。あとはガイド協会さんのプログラムと組み合わせると、なんでこの地域に人が暮らし続けたかがきっと分かる。この地域の魅力を伝える入り口みたいな存在です。



お茶漬けプログラムについては裏ページで特集しています！

―実際お茶漬け食べた人の反応は？

反応はまずは「おいしい」って言葉はもちろんもらいます。あとは地産地消っていう面にすごくこだわっているお客さんとかは、もうフードマイレージとかよくいうけど、この海峡の中でできあがって、このエリアの中で消費してるっていう観点が素晴らしいっていうのを評価してもらったりとか。体験ですよ。食べてもらうというよりは。



インタビュー時の齋藤さん

―これまでの活動で苦労したことは？

お茶漬けに関しては、まず最初のプレゼン資料を作るのと、自分の英語力が追いついてないっていうのに苦労しました。特に外国の方に対しては「うまみ」というものの説明がすごく難しく。産業ガイドに関しては、どうやって根拠を持って「美味しい理由」を伝えるか。他の地域、ましてや周辺の地域でも同じ海産物がとれるけど、大きさや食感や栄養価だったりとはきっと各場所によって違う。自然環境と漁業は密接に関係しているから。それをどうやって堅苦しくならず根拠を持って伝えるのかというのが難しい。でもそれ以上に本当にいろんな人に助けてもらいながらやってきたから、苦労っていうよりはすごく楽しくて。自然や歴史、ガイド、漁業、酪農など、各分野においてのたくさんの師匠がたくさんいることや、ご協力して下さる方々に感謝です。

―では良かったなって思うことは？

地域の人が「楽しい！」って言うってくれるのが一番嬉しいです。なんでやってるのか？っていうのに繋がると思う。改めて、この地域って、国内外の人からみてもすごいところなんだって思ってくれて、楽しい！って思ってもらえるのが一番！もちろんお客

さんへのおもてなしは全力で行いますが、とにかく地域の方がやりがいを感じてくれることを大切にしたい。

―今感じる標津町の魅力は？

やっぱり、人はすごいですよね。色んなグループが立ち上がる力みたいなのがすごいなって思う。あと、この1年間日本遺産のことをすごく勉強させてもらったから、人が1万年も住み続けている理由をずっと考えてきたけど、多分いろんな人がいるんなところから集まってるから、例えば樺太から、オホーツク渡ってここに来てたり、内陸や北方領土や本州からも来てるし、そんな人たちをずーっと受け入れ続けてきた土地だからこそ、ウェルカムなんだろうなと。あとはサケは捕れるけど、厳しい自然の中で生きてくためには、助け合わないとずっと生きていけない、それが標津人の根底にあるんだと思ったんです。だから、人の暮らしの営みみたいなものがすごく魅力的。

―今後の標津町に期待することやご自身の目標は？

期待することは、憧れるような活動や奮い立たせるような思いを持っている人々が周りにたくさんいるんだから、もし迷っていたりわからないことがあったら気軽に聞いたり、学びあえる関係が築ける風潮になれば良いなって思います。目標はとにかく関係人口をたくさん生んで、標津を持続可能な町にしたい。100年も1000年も続く町にしたい。全ての原動力はここです。あとは、移住者もすごく楽しいんだっていうのを伝えたい。多分最初の一瞬はもしかしたら引いちゃう部分もあるかもしれないけど、やっぱりここに住まないと体験できない自然があるんです。ちょっとドライブしたら、「え、この世じゃない」って思うくらい綺麗な自然とかが見れたりするから、そういうのを、外の人に伝えたい。

―最後に何か伝えたいことは？

私の今までの活動やこれからやっていきたいことはすべて標津に生きる人々がもっているありのままの魅力を伝えることです。その魅力に気付けたのもたくさん地域の師匠のお陰、ご協力いただいている皆様のお陰です。まだまだ勉強不足ですが、将来少しずつでも恩返しできれば嬉しいなと思っています。これからも宜しくお願いします。